原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第17集

閏繰遺跡

（みや　くり）

幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）
に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1999

長崎県教育委員会

閨繰遺跡空中写真

平成７年度調査遺構検出状況

発刊にあたって

本書は，幡鉾川流域総合整備計画に係る圃場整備工事に先立って実施された，閏繰遺跡の発掘調査報告書です。閏繰遺跡は，原の辻遺跡に隣接した弥生時代中期の墓地で，弥生時代の大規模環濠集落である原の辻遺跡の大きな影響下にあったと考えられます。

遺跡の発掘調査は，古くは昭和29年の東亜考古学会の調査に遡ります。この時も箱式石棺や甕棺などが多く出土しております。

今回の調査は，平成７年度に墓域が確認されながらも遺構保存のため埋め戻されていたものですが，水路工事のため再び調査を実施したものです。この墓域は，現在原の辻遺跡で確認されている墓地群の中でも古い方に属し，昭和49年に調査された大原地区の墓地群と同時期と考えられることから，関連性が注目されます。遺構の大半はまだ水田の下に保存されていますので，全容の解明については将来に託したいと思います。

島内にはこのほかにも古墳や古代の多くの貴重な遺跡があり，調査が進められています。今後は，これらの遺跡にも光をあてながら保存活用を図っていくことも大切なことではないかと思われます。

本書が学術研究および郷土史研究の面で活用されることを念願して刊行のあいさつといたします。

平成11年３月31日

長崎県教育委員会教育長　　出　口　啓二郎

例　　言

1．本書は，長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触に所在する閏繰遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は，幡鉾川流域総合整備計画にかかる圃場整備工事に伴って，壱岐支庁耕地課が事業主体となり，調査は県教育委員会と芦辺町教育委員会が実施した。

3．調査は全体の8.5割を農林側費用負担として県教育委員会が平成11年２月８日～２月25日まで行い，1.5割については芦辺町教育委員会が国庫補助を受けて平成11年２月８日～２月25日までの日程で実施した。

4．本書には県教育委員会が主体になった分と，芦辺町教育委員会が主体に成った分を合わせて掲載した。

5．本書の執筆と編集は，安楽が担当した。

6．本書関係の遺物は，原の辻遺跡遺跡調査事務所で保管の任にあたっている。

7．本書関係の写真は平成７年の撮影は副島が行い，今回は安楽が撮影した。なお，昭和29年撮影の写真の掲載については，九州大学文学部考古学研究室の西谷正教授に許可を得た。
記して感謝申し上げる。

本 文 目 次

Ⅰ　調査の経緯 …… 1

Ⅱ　調査の組織 …… 1

Ⅲ　遺跡の歴史的地理的環境 …… 2

Ⅳ　調査の概要 …… 4

Ⅴ　土層 …… 5

Ⅵ　遺構 …… 5

Ⅶ　遺物 …… 8

Ⅷ　まとめ …… 10

挿 図 目 次

第１図　閨繰遺跡周辺地形図（1/5,000）…… 2

第２図　閨繰遺跡位置図（1/20,000）…… 3

第３図　調査区域図 …… 4

第４図　平成７年度調査遺構配置図（1/150）…… 6

第５図　石蓋土壙墓実測図（1/30）…… 7

第６図　石組遺構実測図（1/30）…… 7

第７図　出土遺物実測図（1/3）…… 9

図 版 目 次

図版１　遺跡遠景及び近景 …… 13

図版２　１号石蓋土壙墓及び１号甕棺墓 …… 14

図版３　平成７年度調査区全景及び遺構検出状況 …… 15

図版４　石組遺構及び平成７年度確認４・５号箱式石棺墓 …… 16

図版５　平成７年度確認６・７・８号箱式石棺墓 …… 17

図版６　平成７年度調査箱式石棺墓及び調査風景 …… 18

図版７　平成７年度調査４～７号甕棺墓及び２・３号甕棺墓 …… 19

図版８　昭和29年調査遺跡全景及び遺構検出状況 …… 20

図版９　昭和29年調査遺構検出状況 …… 21

図版10　出土遺物 …… 22

Ⅰ．発掘調査に至る経緯

芦辺町・石田町・郷ノ浦町の３町を流れる幡鉾川流域の水田約350haについて，基盤整備を目的とした県営幡鉾川流域総合整備計画が，平成４年度から13年度の予定で始められた。本遺跡の所在する地区も平成５年度から事業が進められることとなった。この地区は古くから板石や土器片が出土することから墓地群の可能性が考えられていた。

京都大学や九州大学を中心とした東亜考古学会は昭和26年から壱岐，対馬の考古学的調査を実施しているが，昭和29年には原の辻遺跡の調査とともに土地改良工事で発見された闍繰遺跡の調査も実施している。詳細な内容については不明であるが，当時を撮影された写真で見る限り，城ノ越期と須玖式期の箱式石棺と甕棺が出土している。調査地点は安国寺の奥まった所から東側の，丘陵がせり出した先端部分である。現在はかなり削平を受けている。

平成７年度の調査は，圃場整備事業に伴っての調査である。当初は，東亜考古学会の調査や，その後の土地造成によって消滅したとも考えられていたが，遺構が残っていることが確認された。遺構は箱式石棺墓９基，甕棺墓７基，土壙墓11基の合計27基である。しかし，この時は，調査を行う時間的な余裕がなく短期間の確認調査にとどまり，盛土することで遺跡の保存が図られた。ただ排水路敷については改めて調査を行うことが，耕地課との間で合意された。

平成10年度の調査は，以上の経過をふまえて実施されたものであり，本調査は，調査区の1.5割を国庫補助事業として芦辺町教育委員会が行い，8.5割を事業者負担分として県教育委員会が実施した。

Ⅱ．発掘調査の組織

１．平成７年度調査

調査主体	県教育庁原の辻遺跡調査事務所		
調査担当	県教育庁原の辻遺跡調査事務所	係長（副参事）	副島和明
	同	文化財保護主事	石尾和貴
	同	同	川口洋平

２．平成10年度本調査

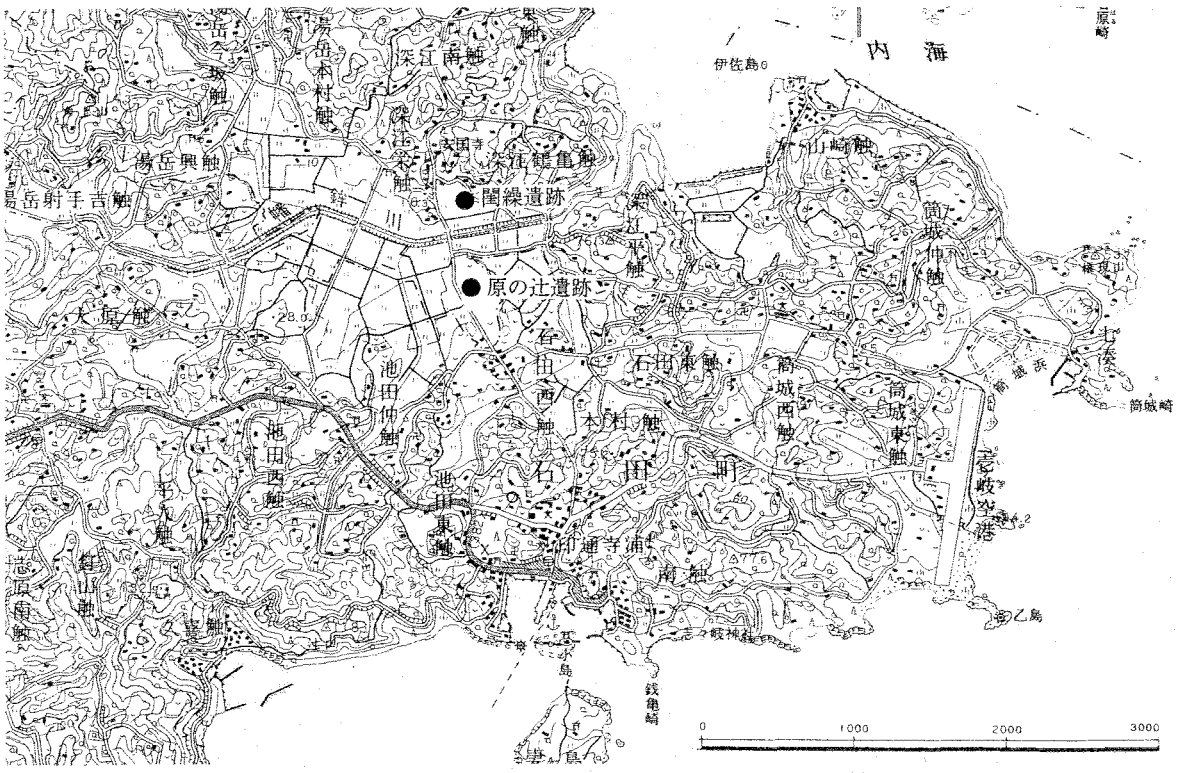
県関係			
調査主体	県教育庁原の辻遺跡調査事務所	所長	田川　肇
調査担当	同	課長	安楽　勉
町関係			
調査主体	芦辺町教育委員会	教育長	川原　忠雄
調査担当	同	社会教育係長	山口　信幸
	同	文化財指導員	山口　優

Ⅲ．遺跡の地理的歴史的環境

壱岐島は，対馬海峡と玄界灘の間に位置し，九州本土部と大陸・朝鮮半島を結ぶ飛び石的役割を果たしてきた。東西15km，南北17km，面積139km²で全国島嶼の中で第20位の広さである。島の地形は大半が玄武岩台地で起伏が少なく，最高峰の岳の辻で213mにすぎない。最長河川は島のやや南に位置し，西から東の内海に注ぐ幡鉾川で河足は約９km，下流には本遺跡の位置する深江田原と呼ばれる平野が開ける。海岸線は，西部にリアス式の海岸が発達し，東部はなだらかで海岸砂丘が見られる。

歴史的には大陸との中継地点として重要な役割を担っており，特色ある遺跡も多い。長崎県遺跡地図には埋蔵文化財の数は331件が掲載され，内訳は旧石器時代５，縄文時代４，弥生時代58，高塚古墳264となっている。弥生時代に限ってみれば，『魏志倭人伝』に記載された一支國の「王都」と特定された原の辻遺跡（BC３世紀～AD４世紀）が先ずあげられる。遺跡の規模100ha，多重環濠を有し，外濠内の面積は24haで豊富な出土内容から国の史跡に指定された。本遺跡に隣接しており密接なかかわり合いを持つものと考えられる。現在も発掘調査が計画的に行われ，保存整備基本計画が策定され，今後の遺跡の保存活用が期待されている。

この他，島の北西部にはカラカミ遺跡が所在している。この遺跡は，複雑な地形に集落が形成されていることや，骨角器類が多く出土していることから，漁撈を生業とする水人集団の遺跡ではないかと考えられている。また平成９年に調査された車出遺跡は，幡鉾川の上流に位置し，豊富な遺物の出



第１図　闍繰遺跡・周辺地形図（1/50,000）

1．閨繰遺跡　2．鶴田遺跡　3．原の辻遺跡高原地区　4．同石田大原地区
5．同大川地区　6．同柏田地区　7．同原ノ久保Ａ地区　8．同原ノ久保Ｂ地区

第２図　閨繰遺跡位置図（1/2,000）

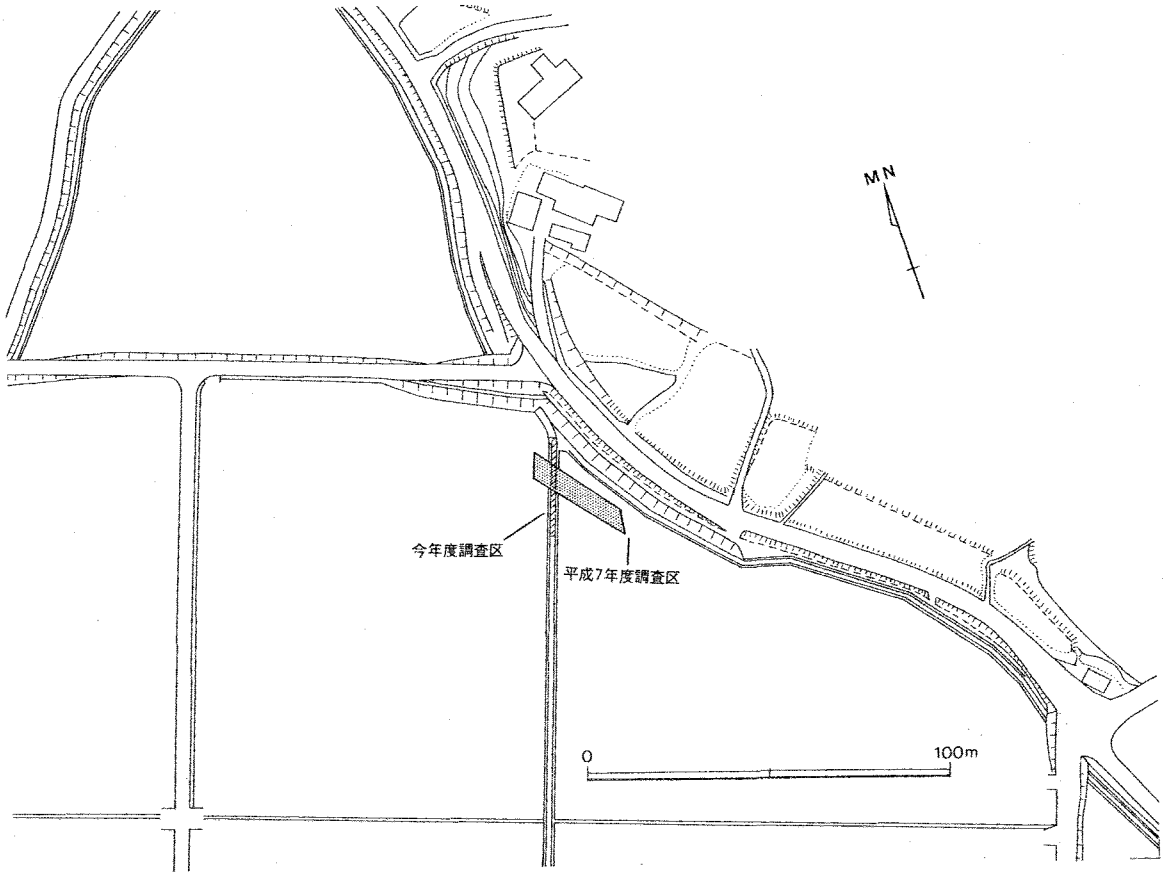
土があった。島内の弥生時代はこの３遺跡が突出しており，一支國連合体を形成し，中でも原の辻遺跡はその頂点にあったものと考えられる。また勝本町北東部の天ヶ原海岸からは，護岸工事中三本の中広銅矛が出土している。この状況は埋納されたもので，当時の航海への安全祭祀と考えられる。

閏繰遺跡周辺では，原の辻遺跡が南へ広がる他は，北の奥まった部分に中世の安国寺跡，その南側に弥生と中世の遺物が出土する安国寺遺跡が位置する。本遺跡と同時期の墓地としては，原の辻遺跡の石田大原地区や，鶴田遺跡があげられる。また壱岐の古墳として最も古い５世紀代の大塚山古墳は，すぐ背後の頂上部に築造され，深江田原を見下ろしている。

Ⅳ．調査の概要

本調査は，平成７年度に遺構の確認を行い保存したものの，排水路工事が計画された55.5ｍについて記録保存措置を講ずるために実施した調査である。県関係分は47.2ｍ²，町関係分は8.3ｍ²である。

調査区は南北に計画された排水路，長さ37ｍ，幅1.5ｍを対象とし，南から北へ１～７に区分けした。１～３区には遺構は見られない。しかし，弥生土器片や中世の輸入陶磁器が若干出土した。輸入



第３図　調査区配置図（1/1000）

陶磁器については西側に位置する安国寺前A地点との関係が考えられる。

遺構は4・5区で確認された。この区は平成7年度調査区内にあたるもので，石列と石蓋土壙墓，小児甕棺墓が検出された。6・7区については遺構，遺物も検出されず，特に7区については岩盤が表土層の下に現れた。今回の調査は平成7年度調査の一部分を調査したにすぎず，大半は水田下に保存されている。なお東亜考古学会による調査地点もほぼ同一地点だったと思われる。地元の人の話によると，昭和20年代には北から南へ畑が突出して現在よりも一段高くなっていたと言われ，畑を水田化する工事の際にも土器片や板状の石片が数多く出土し，墓地が損壊したようである。

V. 土　層

前回の圃場整備の際に出土した遺構は，当時の水田の表土を剥いだ直下から確認されている。それ以前の昭和20年代の畑を水田化した際には，山際の畑が一段高くなっており，この部分を削平した時に遺構を壊したと言われる。現在の水田は2度の造成を受け一段低くなっているが，遺構はかろうじて残ったものと思われる。東亜考古学会調査時の写真（図版9）を見ると，丘陵先端部の下が段々になり，下段の方に遺構が集中していることがよくわかる。平成7年度の遺構分布範囲は前回の北側部分にあたるのではないかと推定される。図版3では北側は土層が厚く堆積しており，その後削平を受けたものの帯状の範囲で残ったと考えられる。

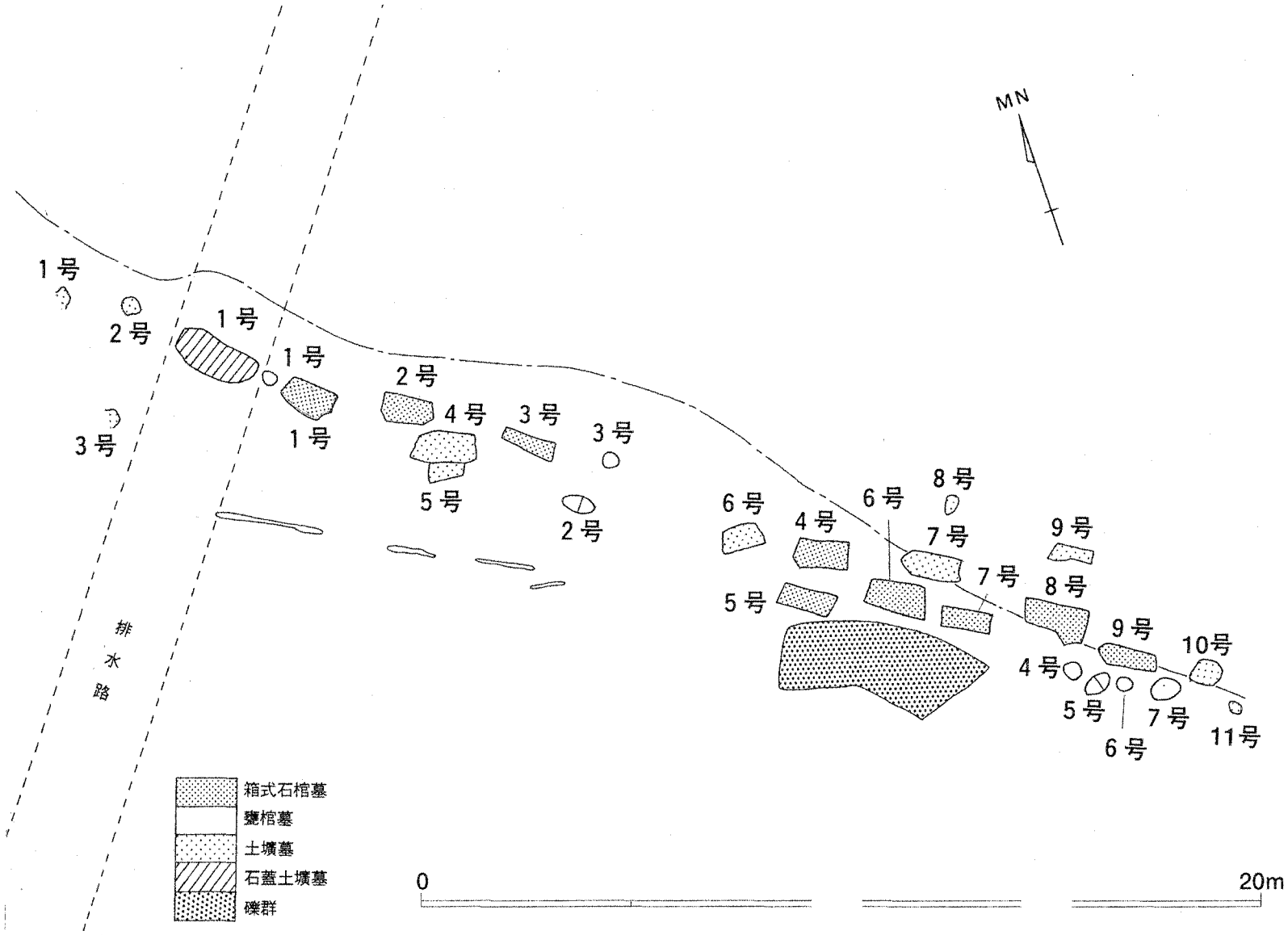
従って今回の調査は遺構面までの層と，それ以外は現水田から1.5m掘り下げたが，旧耕作土およびその下層の茶褐色粘質土に小礫を多く含んだ層まで調査し，この層から若干の中国貿易陶磁が出土している。なお保存されている遺構面から現在の水田面には約1mの盛土が施されている。また6～7区は岩盤から削られており，その上に盛土がされている。

VI. 遺　構

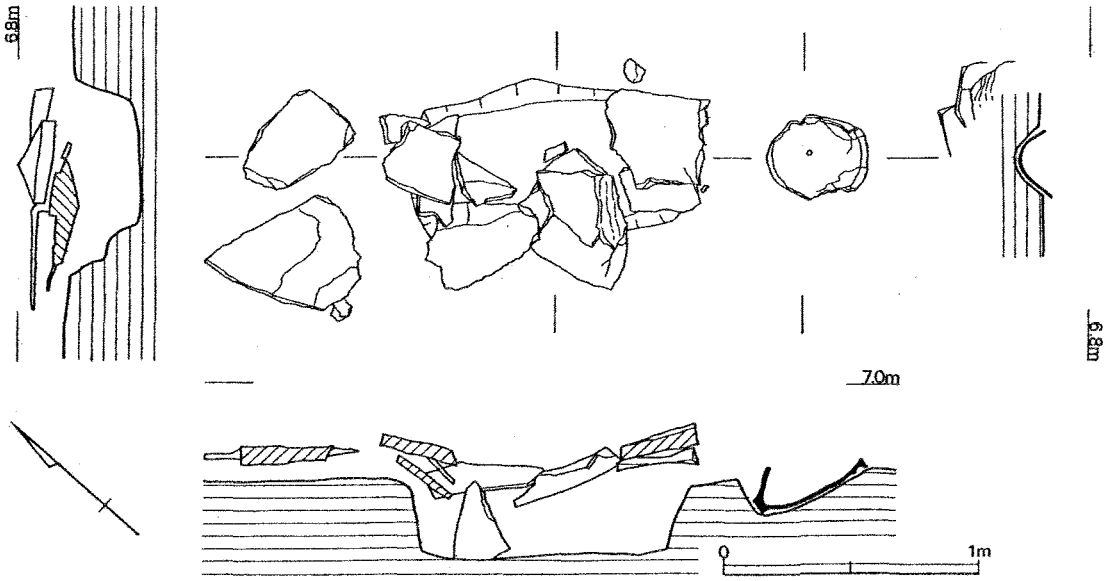
今回検出した遺構は，前回すでに確認されていたものであるが，遺構の表面観察だけにとどまり保存されたため，内容については不明な点が多い。しかし，今回調査した遺構については，性格まで把握することが出来た。平成7年度の調査実測図（第4図）では箱式石棺墓9基，甕棺墓7基，土壙墓11基の合計27基の遺構が検出されている。その中で，今回調査の遺構は1号石蓋土壙墓と1号甕棺墓（小児甕棺）である。

1号石蓋土壙墓（第5図）

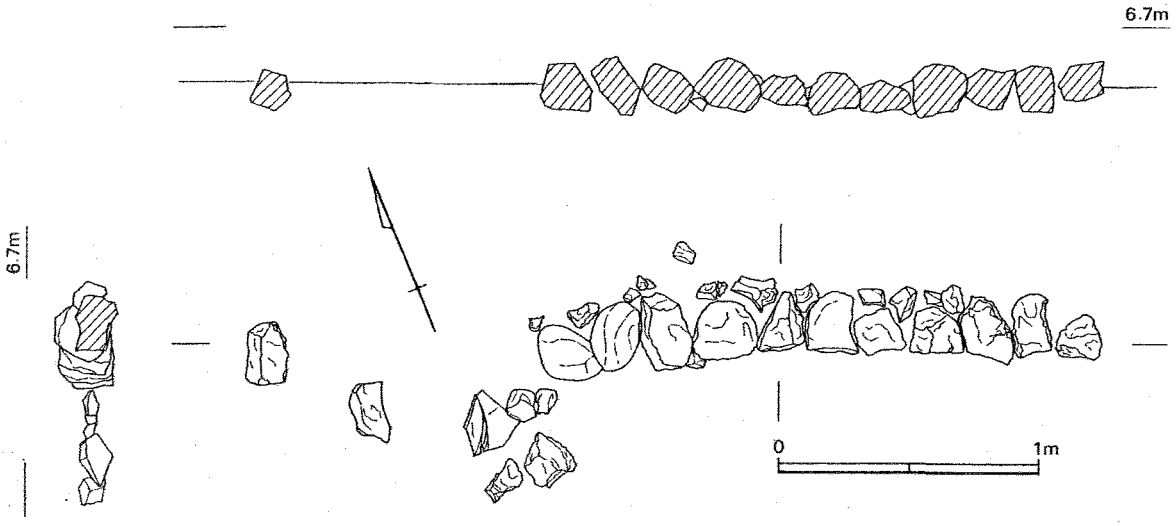
遺構群の西端に位置し，土壙の長軸はほぼ東西で，長さ1.1m，幅約0.55m，深さ0.25mを測る。蓋石は板状の安山岩礫を使用している。中央に空白部が見られるが，この部分の蓋石は西方向に2枚ずれて位置している。土壙の中には三角形状を呈した板石が立っており，小口板の役割を果しているものと思われる。なお遺物は見られない。



第4図　平成7年遺構位置確認図（1/150）



第５図　石蓋土壙墓実測図（1/30）



第６図　石組遺構実測図（1/30）

1号甕棺墓（第5図）

この遺構は1号石蓋土壙墓のすぐ東側で出土の小児甕棺である。単甕で全体の3分の1を欠失している。やや斜めに埋置されるが，掘り込み跡は確認できない。土器は須玖Ⅰ式の古段階と思われ，高さ40.7cm，口縁外径33.7cm，底部径8.8cmを測る。底部から13cm上部に穿孔されている。副葬品はない。

石組遺構（第6図）

4区に東から北西に一直線に伸びる石列がみられる。人頭大よりひと回り小さい石を1列に並べている。旧表土の直下に位置することから，近世以降の水田に関係した可能性が高い。平成7年度に実施された、幡鉾川南側の川原畑地区の調査[註1]でも同じような遺構が出土している。この遺構も暗渠や畔道的遺構であろうと推察されている。

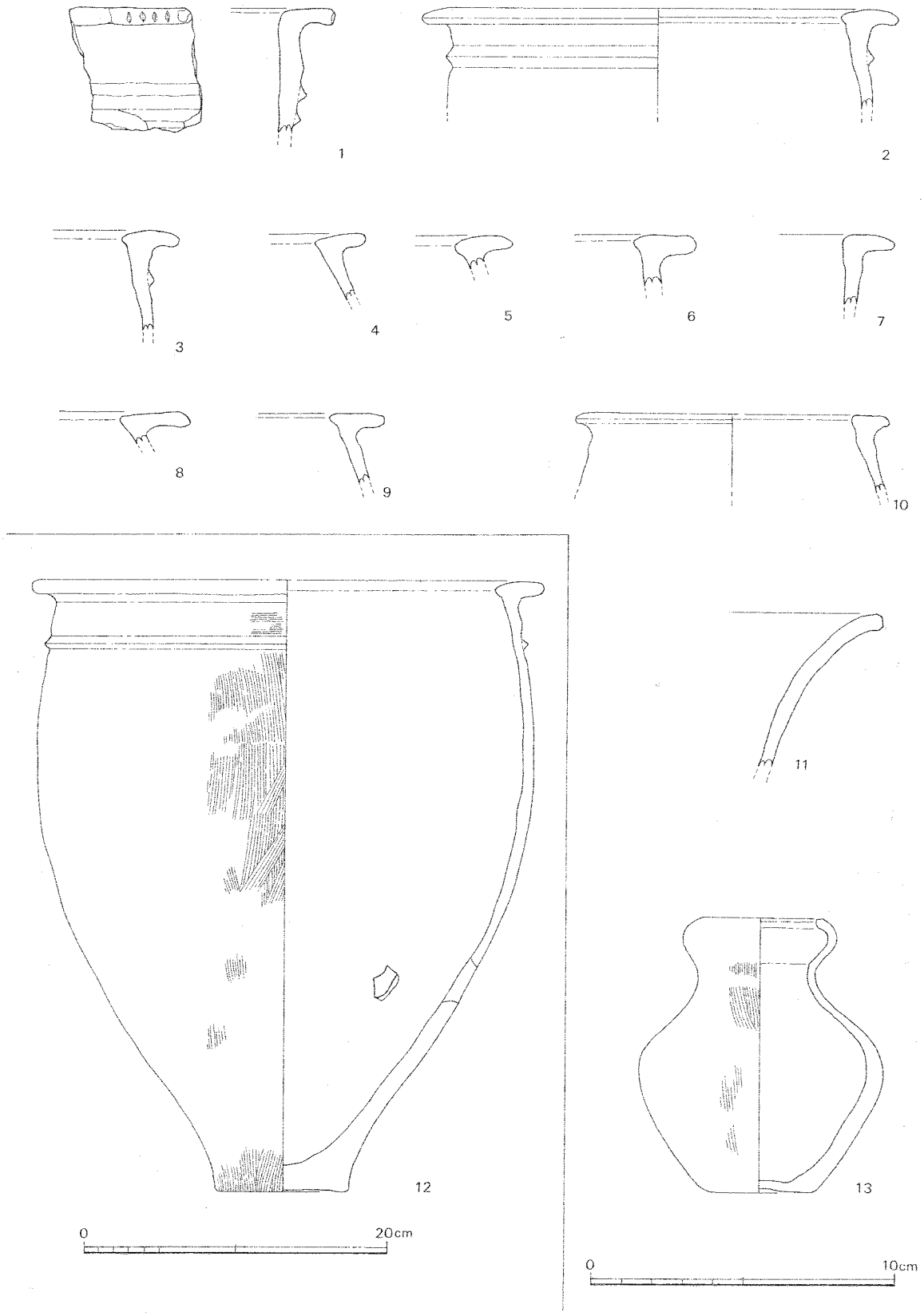
以上の遺構の他に平成7年度調査の遺構があるが，この時点では箱式石棺墓9基となっているが，下部遺構の調査はされていないので，今回のように一部石蓋土壙墓の可能性もある。

石棺墓の規模は長軸1.2mから1.5m，短軸0.5m程度のものが多いようである。甕棺はすべて時期が把握されている訳ではないが，弥生時代中期が主体である。合口甕棺墓は2基，小児用甕棺墓は4基確認されている。土壙墓は11基確認されているが，形状は方形や楕円形のものなど様々で，規模も一定していない。

昭和29年の東亜考古学会の調査では箱式石棺墓14基，甕棺墓10基余りが検出され管玉4個が出土している[註2]。甕棺は城ノ越期のものも含まれており，弥生時代中期初頭に位置付けされる。

VII. 遺　物（第7図）

遺物は前回調査分も合わせて図示した。1～12は弥生中期須玖式土器口縁部である。1，3～5，12は須玖Ⅰの段階，他はⅡ式である。口縁部の破片が殆どであり全体を知りえないが，おそらく小児甕棺として使用されたものであろう。12は須玖Ⅰ古段階の小児甕棺である。法量については前項で述べたが，口縁部は外に向かってやや高く，内側には突起がわずかに付く。外面の口縁部直下には断面三角形の貼り付け突帯が1条巡る。ハケ目調整が全体に施されている。胎土は白い砂粒や黒色の細い粒子を含み焼成は良好である。色調は外面が茶褐色に対し，内面は口縁部直下から底部にかけて黒色である。水ヌキの穴は焼成後にあけられている。11は広口壷口縁片である。器壁の内外に丹が塗られている。焼成・胎土ともに良好。13は後期の袋状口縁壷である。口縁部を1/3欠くが，ほぼ完形品である。法量は口縁部最大径8.1cm，胴部径11.1cm，高さ13.5cmを測る。頸部から胴部にかけてはハケ目調整が施され，その上に丹が塗られている。底部は中央部がわずかに凹んでいる。器形からして，いわゆるミニチュア土器であり，遺構の副葬品と考えられるが，弥生後期の遺構は確認されていない。



第７図　出土遺物実測図

この他に図示しなかったが，表土層より出土した，中国輸入陶磁器の白磁玉縁口縁数点があるが，これらの遺物は隣接する安国寺前A地点からの流れ込みではないかと考えられる。

VIII. まとめ

今回の調査は前回確認されていた遺構の調査であり，遺構全体の把握が必要であることは言うまでもない。その点では東亜考古学会による発掘調査の公表がまたれる。断片的ではあるが，郷土史家山口麻太郎の一文によって当時の状況を知ることができる。[註3] 安国寺前甕棺，石棺群として「川内川の北向こうの山麓に出た。二所あって，一方は石棺が二個出ていた。一方は石棺と甕棺の群で，大小拾数個あった。これは京大で調査した。」とあり，二つのグループでかなりの遺構の出土が窺える。

墓地群は原の辻遺跡の影響下に営まれたと推察されるが，時期的には中期初頭である。これまで同時期墓地群としては昭和49年調査の石田大原地区があげられ，戦国式銅剣片やトンボ玉等を副葬していた。本遺跡では副葬品の有無について興味深いところであるが，未だ未確認の状況である。今後これまでの調査についての公表を待ちたい。

註1 『原の辻遺跡・安国寺前A遺跡・安国寺前B遺跡』原の辻遺跡調査事務所報告書第4集長崎県教育委員会1977

註2 昭和29年4月26日付新壱岐新聞の記事から

註3 山口麻太郎郷土研究集分冊第三集「壱岐島の先史遺跡地帯について」1970

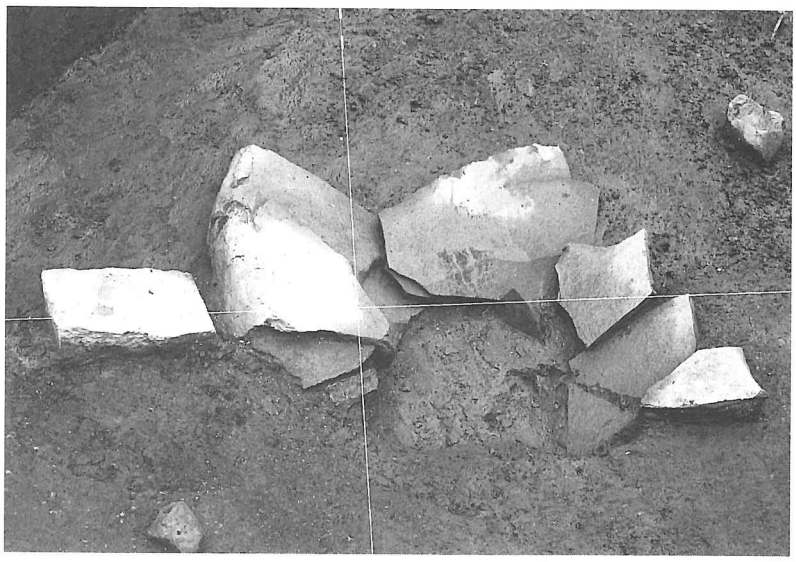
図　　版

遺跡遠景

遺跡近景

図版 2

1 号石蓋土壙墓上面



1 号石蓋土壙墓下面

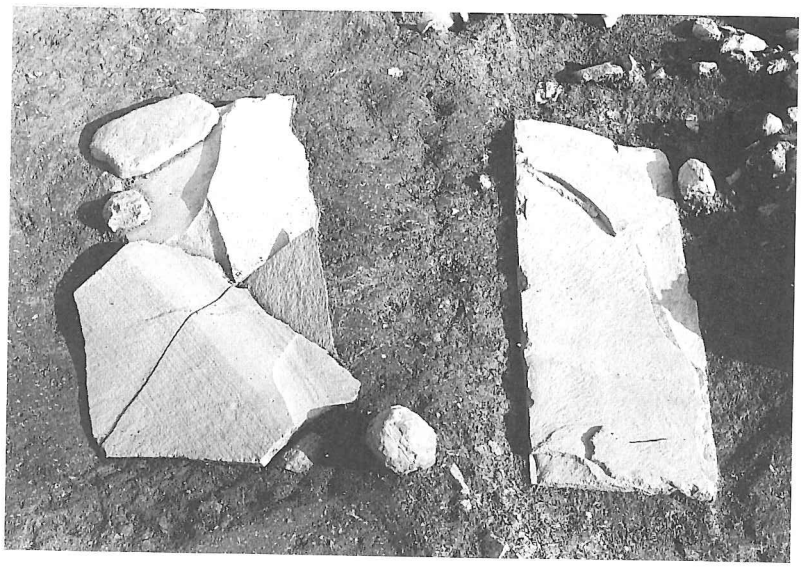
1 号甕棺墓

平成 7 年度調査区全景

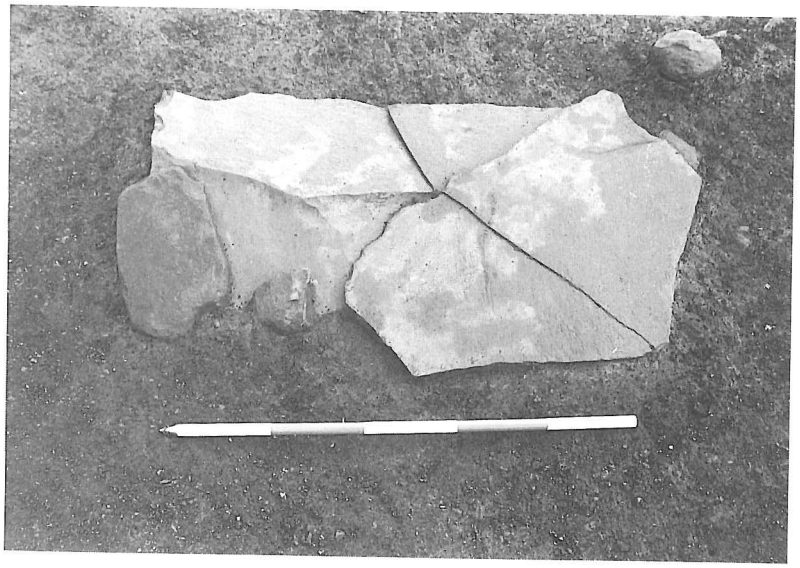
平成 7 年度遺構検出状況

図版 4

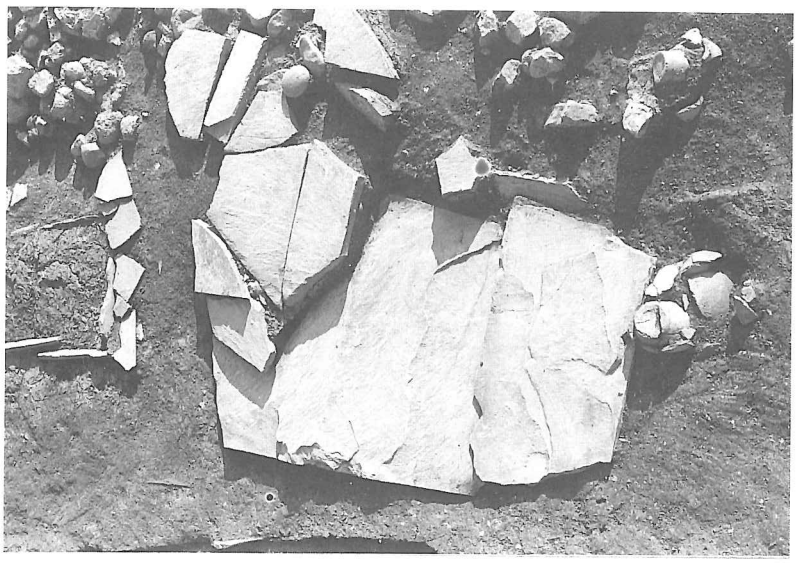
石組遺構



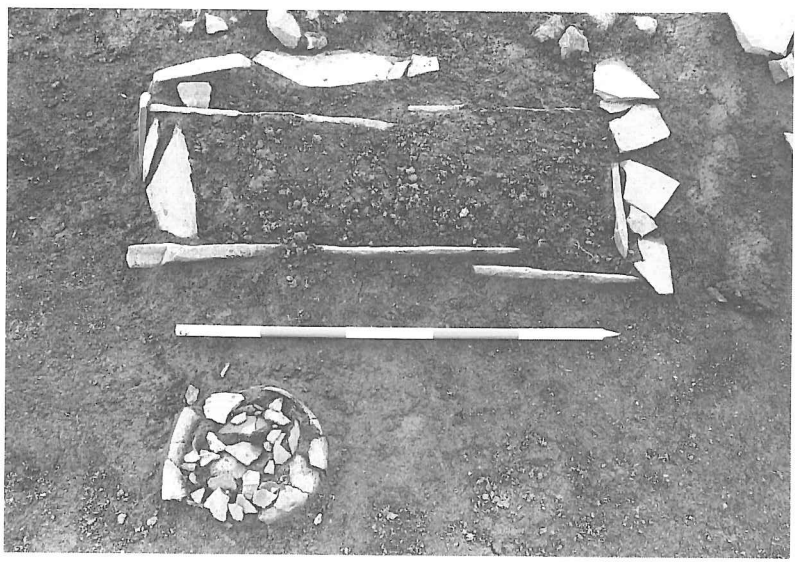
平成 7 年度確認
4 ・ 5 箱式石棺墓



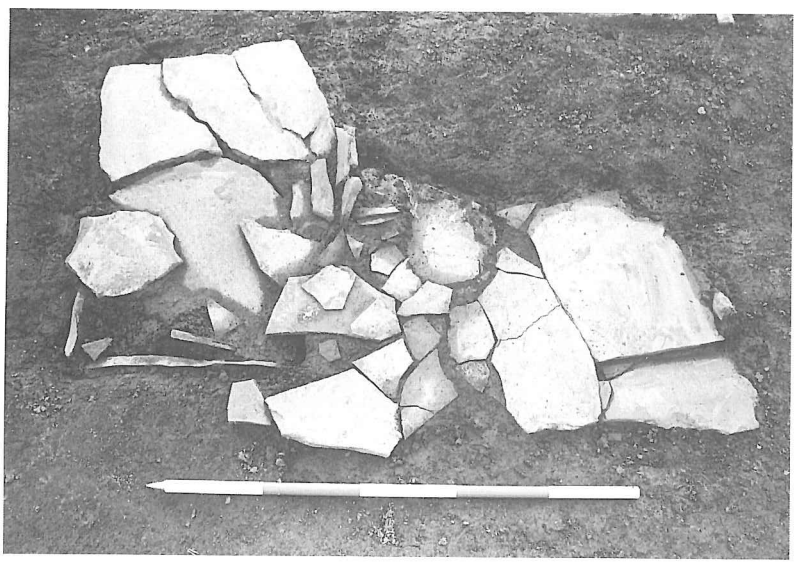
同上
4 号箱式石棺墓



平成 7 年度確認
6 号箱式石棺墓

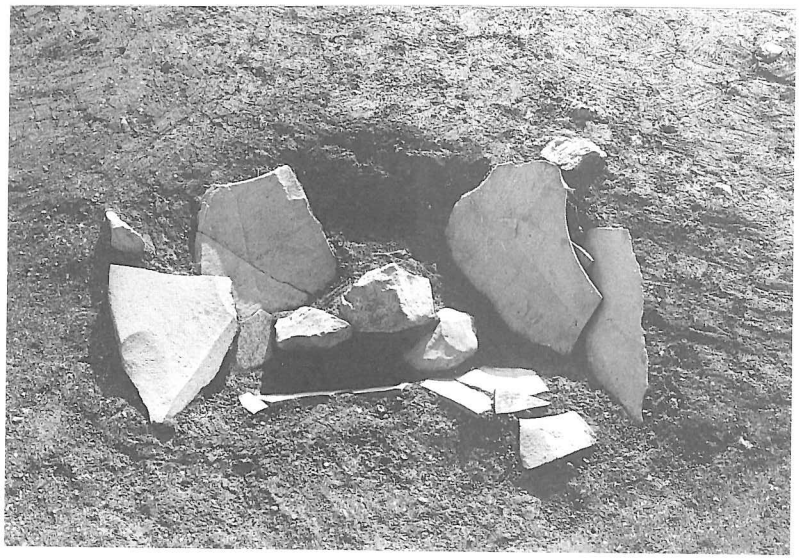


同上
7 号箱式石棺墓



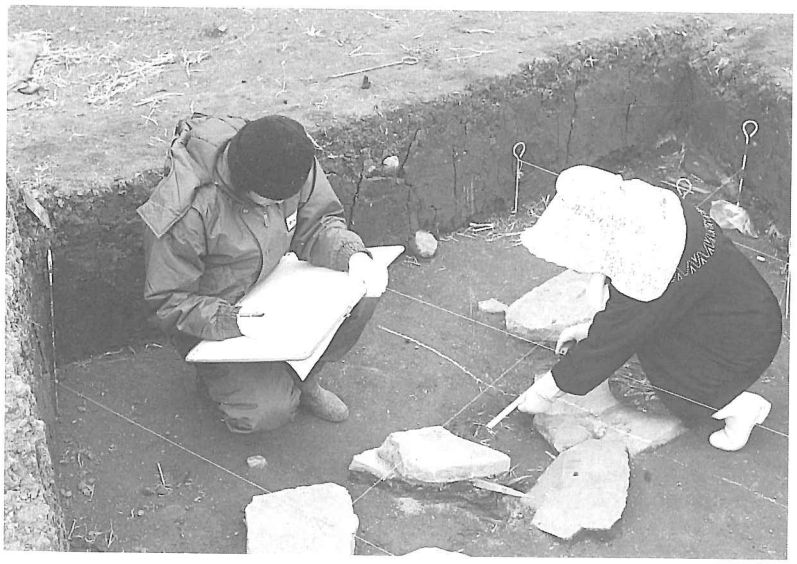
同上
8 号箱式石棺墓

図版 6



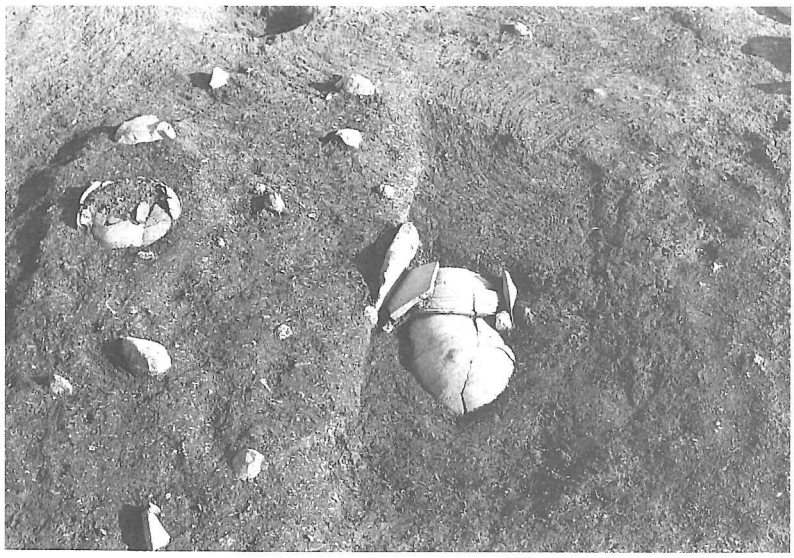
平成 7 年度確認
箱式石棺墓

平成 7 年度
調査風景

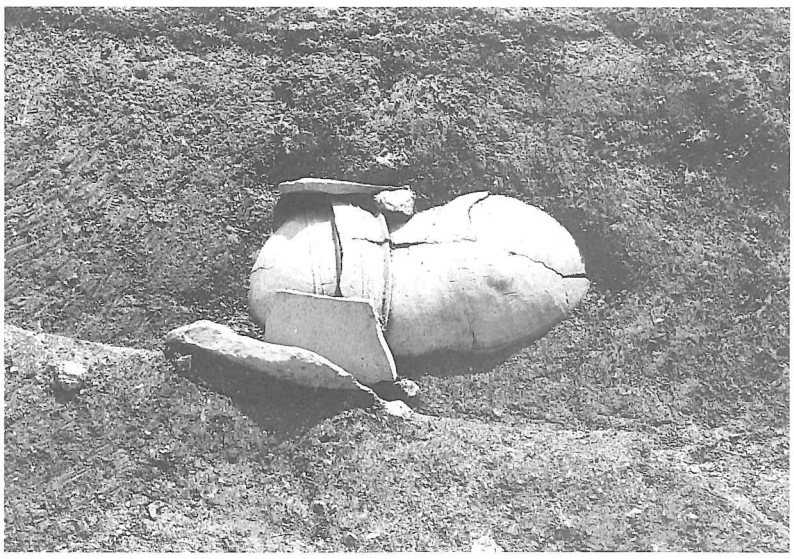


平成10年度
調査風景

平成 7 年度
4 ～ 7 号甕棺墓



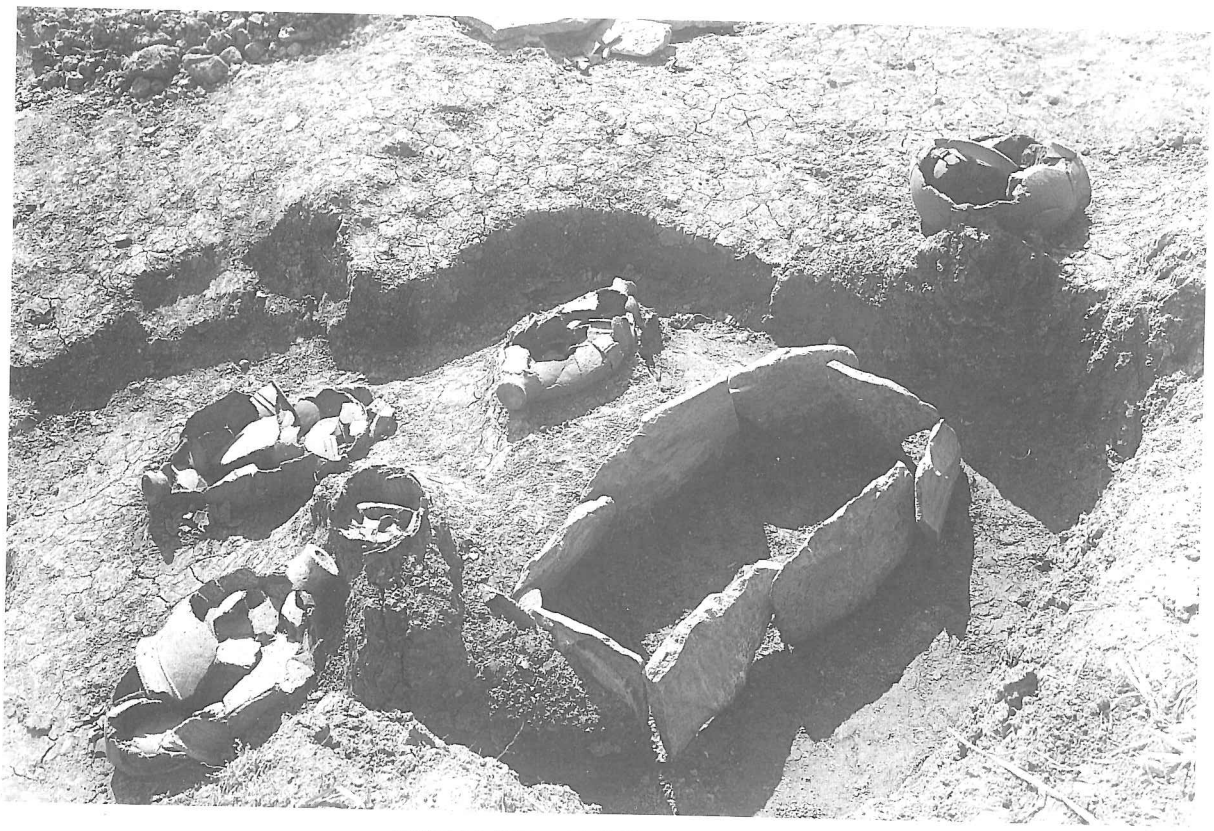
同上
2 ・ 3 号甕棺墓



同上
2 号合口甕棺墓

図版 8

昭和29年撮影　遺跡全景（九州大学考古学研究室提供）



昭和29年調査　遺構検出状況（同上）

昭和29年調査　遺構検出状況（九州大学考古学研究室提供）

図版10

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	みやくりいせき
書名	閏繰遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告
シリーズ番号	第17集
編著者名	安楽　勉
編集機関	原の辻遺跡調査事務所
所在地	〒811-5322　長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触1902番地1　TEL(09204)5-4080
発行年月日	西暦　1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
閏繰遺跡 (みやくり)	長崎県壱岐郡 (ながさきけんいきぐん) 芦辺町 (あしべちょう) 深江鶴亀触 (ふかえつるきふれ)	42423	90	33 45 46	129 45 13	19990208 19990225	55.5	農業関連 圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
閏繰遺跡	墓地	弥生	箱式石棺墓 甕棺墓 石蓋土壙墓 土壙墓	弥生土器	